

第2回札幌市まちづくり戦略ビジョン審議会 事前意見一覧

※審議会委員へ事前に会議資料を配布し、資料に対して予めいただいたご意見について、可能な限り表現を変更せずそのまま掲載しています

※氏名の五十音順で掲載

椎野亜紀夫委員

基本目標「身近なみどりを守り、育て、自然と共に暮らすまち」

- ・ 市民が身近なみどりに親しむことで札幌の自然の豊かさを享受するとともに、自然環境との共生についての知識・理解を深める機会を創出する
- ・ 身近な自然資源を活用した子どもの自然体験活動機会を創出し、札幌の自然環境の大切さを学ぶきっかけをつくる
- ・ 市民が「歩きたくなる」身近なみどりの散策路整備や、お散歩マップづくり等による情報発信を行い、市民の健康寿命延伸に貢献する
- ・ 市街地内の空地・未利用地を活用して市民を担い手とする花壇や菜園づくり活動を支援し、日常的な外出機会創出と地域のつながりの再構築を促す
- ・ 自然域の森・川の豊かさを守り、水循環を促すとともに保水力を高め、市街地における自然災害の未然防止や軽減化を実現する
- ・ 市街地に整備された都市公園等のオープンスペースの防災・減災機能を高め、有事における市民生活の安全を確保する

高野伸栄委員

資料5の中のユニバーサルについて、「誰一人」、「誰もが」として、人へのユニバーサルについては述べられているが、「時」すなわち、365日24時間のユニバーサル。冬季の厳しい季節や環境を含めて、「いつでも」というユニバーサル性も必要ではないか。

高橋彩委員

都市像において、札幌の強みの一つである「豊かな自然環境」と、それを守る都市としての姿勢を、さらに前景化しても良いのではないかと考えます。札幌の地理的特徴を活かした様々な取組実績、築かれてきたみどり豊かなまちの姿、委員の皆様が指摘する強み等を踏まえると、札幌は、世界に対して新たな都市の姿を示すことができるポテンシャルを十分に持っていると思います。

1. 若者の道外流出について

若者は、経済活性化において大きな人的資源であり、道外への若者の流出について、札幌、道内での産業基盤の弱さが起因していることは、多くの委員の皆様がその認識を共有しているところだと思います。

前回の審議会では、私は製造業が少なく、また、特にサービス産業において賃金体系を上げる必要があると述べさせていただきました。ビジョンの計画期間内には、新幹線の札幌延伸が実現し、空港、高速道路網と合わせて、札幌と道内各市町村との人流、物流は格段に飛躍されることが期待されることから、国内外の企業にアピールできる材料になるものと考えます。これまでもビジョンの中に若者の流出についての記載はありましたが、例えば先端技術産業の製造部門の誘致を目指すことや、札幌の強みを生かした産業を興していくなど具体的な対策が見えていなかったように考えます。より強力な対策について、皆さんの意見を集約し、ビジョンにも可能な限り具体的に記載した方が良いと考えます。

2. スポーツイベントの誘致について

札幌は、1972年に冬季オリンピックを開催し、それ以降数々の冬季イベントを開催し、国内外に「ウインタースポーツシティ」として認識されており、この部分をさらに推進していくこと必要なことと考えます。

一方、夏季のスポーツイベントについては、サッカーやラグビーなどのワールドカップ予選が行われ、知名度が上がっている状態であり、今年も東京オリンピックの女子のサッカー予選、競歩、マラソンが行われる予定になっております。札幌の強みは四季がはっきりしているだけではなく、夏は冷涼であります。温暖化が進むに従い札幌の気候はウインタースポーツに限らず、夏季のスポーツイベントを開催するにも適地であると考えます。

施設整備等の課題は生じますが、長期的な視点で取り組む価値があるのではないかと考えます。コロナ禍により観光産業は大打撃を受けておりますが、新たな需要喚起を起こすためにも、札幌のスポーツ面でのイメージを上げることが必要だと思いますし、それが新たな企業誘致にもつながる可能性があるのではないかと考えます。

3. カーボンニュートラルに関して

政府の骨太方針 2021 では、「2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会を目指す」ことが示されており、特に北海道においては「ゼロカーボン北海道」という形で示されております。カーボンニュートラルへの取り組みは、国内に限らず国際的な流れであり、札幌市においてもしっかりと取り組まなければならない課題であり、新たなビジネスの創造のきっかけにもつながると考えます。脱炭素社会への取り組みについては、ビジョンの中では環境に記載されておりますが、国内外の状況を鑑みもう少しはっきりとした表現で強調しては如何と考えます。

「まちづくりの都市像及び基本目標」について

3つの重要概念（ユニバーサル・ウェルネス・スマート）を定め、基本目標を置くということによってよいと思います。

都市像（案）で「支える側」「支えられる側」という従来の考え方をより人に着目した「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」を先に掲げるとあります。

本当の意味の共生社会の実現には、多様な人がいて当たり前の環境に慣れることです。そのためにも、建物のバリアをなくすこと、心のバリアフリーの推進、お互いを認め合い知ること。これが、大前提だと思います。

ユニバーサル、ウェルネス、スマートの3つの概念に共通して思うことが、札幌のまちの中に、障がいがある人もない人も、年齢や国籍、性別に関係なく多様な人が当たり前自然に混ざりあって生活していける環境が重要ということです。

目標に掲げたり言葉で言うのは簡単ですが、現状ではまだまだ遠いと感じています。それは、自分には関係ないこと、自分とは違う人を想像して思いやりの行動をとることができない、排除してしまうところがまだあります。また、自分とは違う人をどう対応して良いか分からず、面倒くさいと思ってしまう、線引きしてしまったり関わらないようにしている人もいるのではないのでしょうか。新しくできたお店でも段差が作られていてバリアがあって、がっかりすることもあります。「設計者やオーナーはどうしたのだろう」と思います。ハンディーのある人や高齢者、ベビーカーの親子連れは来なくて良いと思っているのかもしれませんが。

しかし、札幌もやがて高齢者人口が4割になる予想です。自らお客さんの選択肢を狭めていますね。

これからは、インバウンドの観光客も戻ってくるでしょう。札幌は冬季オリンピック誘致や新幹線延伸などで多様な人の往来が増えていきます。普段、慣れていないものには、どう接して良いか分からないから特別視することがあるのかもしれませんが。ぜひ、誰もが安心して何処でも行ける札幌のまちになりますことを希望します。

また、高齢者といっても元気でまだまだ活躍できる生産性を持った素晴らしい方もたくさんいるので、生涯現役でこれを活かせる場所も必要ですし、女性の活躍の場所も色々な視点で創ることも可能だと思います。今の若い人たちはITを自在に使いこなしている人が多いので、それを札幌でビジネスとして地元を離れず定着できる仕組みや企業も増えると良いと考えます。

札幌は新しいチャレンジができる都市だと確信しています。私自身も、ピンチをチャンスに変えて来ることができたのでそう思うのです。多様な人へのチャンスの種をたくさん撒き続けていける札幌を望みます。アフターコロナが変革の時と捉えます。SDGsも含め、まずは知ることから意識を変えろという重要性を提案いたします。

山本一枝委員

資料4のまちづくりの基本目標について

こども・若者の項目の基本目標1～3を達成するためには、経済の基本目標10～12を実現させる、札幌で産業を興し、発展させる人材が、数多く生まれることが必須であり、まさに車の両輪である。

札幌は明治以来、時代とともに主役となる産業が変化して来た。今後益々企業の業種の変化は大きくなると思われる。この札幌の未来の経営者が、高付加価値商品や高付加価値サービスを生み出すための仕組みを生み出し、しっかりと機能させる必要がある。

例えば、現在の札幌の企業がスタートアップ企業を支援する仕組み作り（先輩企業から経営のノウハウを学ぶことや、仕事の提供、投資等の資金の提供。）や、海外に商品を売る為の支援の仕組み（他国の商慣行やビジネス英語を習熟する場や、国に合わせた契約方法等を学ぶ場作り等）等、多様な経験を有する札幌の人材を活用すると、発展に繋がる支援の仕組みが多数考えられる。

勇気と信念をもって起業したスタートアップ企業が発展するには、多くの仕事をこなし、雇用し、人を育て、継続することが重要である。札幌の経営者は、未来を創造する「出る杭を打つ」ことなく、それらの企業を積極的に支え育てる、「出る杭を伸ばすまち」づくりが出来る、未来志向の経営者でありたい。

未来の産業を興し牽引する人材を育てることに、今こそ産学官で力を合わせる必要がある。

山本強委員

都市像

「日本の未来をけん引する北の拠点都市」

アジア地域を代表する北方圏都市としての誇りを持ち、札幌市が日本・アジアの未来をけん引する重要拠点となるというイメージを持たねばなりません。

北海道がアジアから魅力的に見えるのは、自分たちとは違う環境、生活、そして産業があるためです。数値的な豊かさや満足度ではなく、比較しようが

ない多様性の上に魅力が創造されているのだと思います。札幌が未来の暮らし、ビジネス、まちの形を提案するぐらいの心意気を持ちたいです。

まちづくりの基本目標

新しい生活スタイルやビジネスが創発しやすいまちづくりを目指す（ビジネス創造プラットフォームの実現）

一人ひとりの個性を尊重し、誰一人取り残さない多様性のあるまちづくりを目指す